

西安碑林博物館所蔵の石造物

はじめに 中国社会科学院考古研究所との共同発掘調査は2001年度から5ヶ年計画で実施した。調査対象は陝西省西安市に位置する唐長安城大明宮太液池遺跡である。この遺跡の発掘調査では、唐代の宮城苑池内で使用された石造物が多数出土した。すでにわかっているものだけでも、礎石、彫刻を施した基壇外装、欄板と親柱、燈籠、獅子や象などの彫刻がある。ほとんどは破片で、全体像がわからないものが多い。

これらの石造物を考察する上で、類似品の調査をおこなう計画を立てた。西安市内にある陝西省碑林博物館にはほぼ完形の欄板と燈籠が所蔵されている。いずれも収集品で出土状況は明確ではないが、太液池遺跡出土の石造物を研究するうえで重要な比較資料となる。当研究所では西安碑林博物館の協力を得て欄板と燈籠の調査を計画し、2007年3月19日に実施した。写真撮影を牛嶋茂（写真室）、燈籠の調査を箱崎和久・金井健（都城発掘調査部遺構研究室）、欄板の調査を今井晃樹（都城発掘調査部考古第3研究室）、写真撮影補助を南部裕樹（立命館大学講師）がおこなった。

欄板 この石造物は1955年に西安市東郊外にある唐長安城興慶宮遺跡から出土したとあるが、詳細な報告はな

い（『陝西古代石刻芸術』三秦出版社、1995、99頁）。

中国建築における欄干は欄板と親柱からなる。今回調査した欄板は通称青石とよばれる石灰岩の1枚の板石を彫刻して製作している。全体に灰白色を呈するが、水ミガキで仕上げた面は青灰色である。架木そのものは失われ架木を支える3本の束も一部欠けているが、下半の彫刻部分とその周囲の枠はほぼ損傷なく残っている（図33）。

各部の寸法は最大値を示す。長さ127.3cm（両脇のはぞは含めない）、底面から彫刻部上枠までの高さ51.5cm、彫刻部下枠の高さ15.0cm、厚み18.0cm、彫刻部のみの高さ28.2cm、幅98.3cm、彫刻部上枠の高さ8.3cm、厚み18.0cm、彫刻部両脇枠の両脇部の幅15.0、厚み12.5cmをはかる。

中央の彫刻部には2頭の有翼馬が配され、その周囲に雲気文をあしらった透彫りになっている。彫刻部を囲む枠はすべて水ミガキされ平滑で、植物文の線刻画で満たされている。彫刻部上枠の上面にも線刻がある。上枠上には雲気文の束が3本あり、これらが架木を支えていた。この欄板には表裏があり、上述した彫刻とは別の面は異なった図柄が彫刻されており、粗い仕上げになっている。有翼馬の面が表面になるだろう。欄板底面は平坦で鑿痕がのこり仕口はみられない。両側面は全体に凹面となり鑿痕がのこる。側面下端にはほぞが彫り出されている。欄板側面のほぞは親柱のほぞ穴にはめ込み連結される構

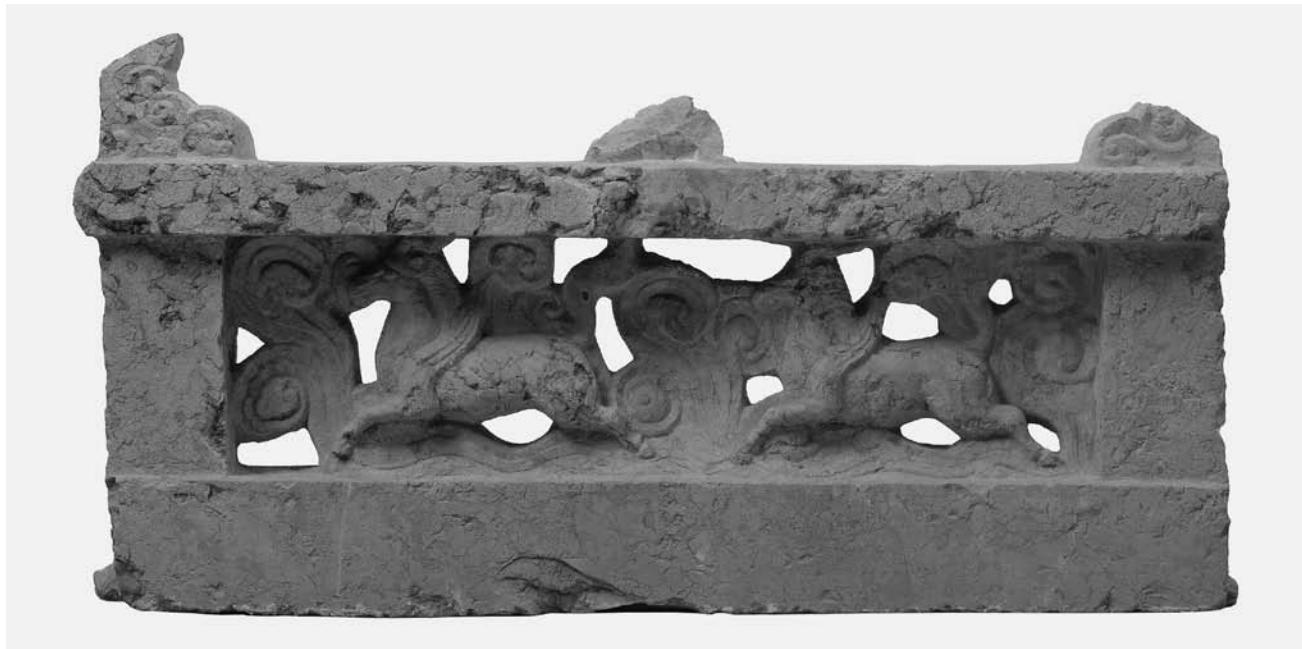


図33 欄板

造である。また、欄板側面の形状から親柱は円柱状であったと推測される。底面には仕口が見られないで、欄板は建物基壇の葛石か地覆石に直接据えられたと考える。しかし、これでは安定しないので親柱の底面にはぞかほぞ穴があり全体で固定されていたと推測する。

太液池出土の欄板とは透彫りの彫刻図案がことなるが、石材や寸法は非常に近い。太液池出土品の長さは126.7cm、架木までの高さは66.7cmある（『紀要2006』）。これを興慶宮出土品と比較すると、長さは8mm差でほぼ同寸法であるといえよう。欄干の長さは当時の4尺で設計されていると考える。出土地点や太液池出土品との寸法の類似からも唐代の作といえよう。

燈籠 1959年に陝西省乾県西湖村石牛寺から博物館に移管されたものである（『陝西古代石刻芸術』三秦出版社、1995、98頁）。

燈籠は青石製で全体の高さは193cmをはかる。8つの部位から構成されており、上から順に請花、笠、火袋、蓮華座、円形座、中台、竿、台座となる（図34）。

請花は平面方形で四辺には雲文状の浮彫りが計8つ配される。下部は断面方形の柱状で笠の頂部にある穴に差し込まれている。上面には突出部があり、その中央にはぞ穴があることから、本来は宝珠の類が載せられていたと考えられる。笠は宝形造りで瓦屋根にする。軒先には蓮華文の瓦当を表現し、隅木の先端には龍頭が飾られる。隅木下面の龍頭よりやや後方には小穴があり、風鐸がさげられていたのだろう。軒（笠の底面）には格子文と蓮華文が一面に線刻される。傘の底面中央には火袋をはめる仕口がある。火袋は方形で各面に正方形の穴をあける。蓮華座の上面には火袋をはめる方形の仕口を作り出しているが、水ミガキされておらず加工痕がのこる粗い仕上がりである。円形座は6つの突出部があり、その先端にはハート形を逆さにした文様と小さな珠文を配した円形文が交互に飾られる。円形座をはめる仕口は火袋にも中台にもみられない。中台は平面八角形で角の稜線上端に龍頭をかざる。側面はすべて線刻文で満たされている。竿には4頭の龍が絡み合う。龍頭は正しく4方向に配されそれぞれ正面からやや下を向き、口からは雲状のものを吐き出している。右前足で中台を支え左前足で後足の付け根を押さえている。龍頭の上部と後足の間の空間には雲文が飾られる。台座は正方形の台上に8つの山

の浮彫を配している。そのうちの一つには座仏風の彫刻がある。この彫刻のある面が燈籠全体の正面であろうか。

中台や竿に飾られた龍の頭部、手足や鱗の表現が太液池出土の欄板の龍と類似しており、唐代の作と考えてよいとおもう。竿に龍を表現する例は中国においても少なく、大きさや作りの良さからも、かなり格の高い燈籠であると考える。

おわりに 太液池出土の石造物は破片が多く、全体像の不明なものが多いため、発掘調査を経た出土品であり、時代が唐代であることは間違いない。これらの資料は唐代石造物の基本資料となる。一方、中国各地の博物館には採集あるいは寄託された石造物が散見する。これらは完形のものが多いが、その時代については全体の雰囲気から判断されることがおおい。破片の出土品と完形の遊離資料を比較することで、唐代の石造物の特徴を浮かび上がらせていくことが今後の課題となる。

（今井晃樹）



図34 燈籠